

季能古博物館だより



福岡藩窯・高取焼
置物 孝子正助父親洗足の像
高取重任 安政四（1857）年作

亀井学を大成した

大儒 亀井昭陽伝（六）

庄野 寿人

・江戸の昭陽
・昭陽烽火台番に着く

・名君秋月侯の死
・『烽山日記』の紹介

文化四年の正月は、昭陽らは秋月藩の江戸藩邸で迎えた。

元旦は、秋月藩邸で同藩の在府家臣にくみして昭陽も藩主公に賀詞言上をしている。

前日の大晦日（おおみそか）は、旧暦で小建月の十二月二十九日、同日が「立春」に当る。このため江戸も春めいていた。

国元では、妻の伊智三十一歳が、長女少梁は早や十歳、次女敬の八歳、長男の義一郎（後に号蓬洲）三歳と、江戸の父昭陽に屠蘇と雑煮、これに正月料理を盛り合わせて陰膳（かげぜん）旅に出た人の無事を祈って、留守の人が供える食膳（しきぜん）をして、子供たちと父のお江戸正月を祝福。また昭陽も留守の父母、妻と子供たちの息災（わざわいの無いこと）を祈ったであろう。

昭陽は、事に際してはよく記録するのであるが、何故かこの江戸滞在については日記なども見られない。二年後の文化六年八月、本藩は昭陽

に烽火台番を下命する。このため昭陽は約二年余にわたる月々十日の山ごもり勤務をするが、この体験を『烽山日記』として記述、これは昭陽の文名を高めた名作にされる。この中で、江戸往復と、この間に秋月公による再三にわたる恩遇など回顧し詳録している。本稿はまもなく昭陽の烽山勤務を述べる段階に入るの

で、その『烽山日記』により、詳細を述べながら空白の江戸記事を丹念に拾い上げることにする。

江戸に登った昭陽は、江戸には著名な学者も多いので、自らを「井中の蛙である」と極めて謙虚に考えていた。反対に江戸の学者たちは、西海道には、まず少ない徂徠学の存在を亀井父子が明らかに示していること。また、福岡藩が藩校を創設するに当って、藩内には貝原益軒以来の朱子学派と、南冥以下の徂徠学派を平等に認識し、東西の両学派に区分する。いふなれば一藩校制によつて両学派それぞれに運営を認めたの

写真：杉山 謙

能古博物館だより

である。しかも西学問所の教官編成すべて亀井南冥に委任された。

これによって南冥は亀井塾の高弟たちに、その出自(その人の生れ)にとらわれず、藩に士分登用と教官職に採用を承認された。

以上は、まず諸藩にも例を見ない事実であり、福岡藩の英断と、これらを実現させた亀井南冥に全国諸藩と学者たちは目をみはらしたのである。こうした注目と共に、その存続に不安と期待を持たれながらすでに

十五年の実績を積んでいたのである。これが不幸にも福岡城下の西郊から出火によって未曾有の大火となり、この火中に西学問所と亀井家も焼失。ために西学問所の再建は、藩の重大案件となったが、結局は四ヵ月後の寛政十年六月、ついに藩議は再建見合わせを決定した。

これには藩内の東学朱子学派による幕府の異学禁に便乗した策動が審議を左右したとされる。

残念なことは、亀井学に理解を持った藩首脳者に交替を生じていたことも大きな要因に考えられる。

右にあげた事柄と共に、亀井家の当主である昭陽が、父南冥の主著とされる『論語語由』を出版するため江戸に来る。これらは、社交と交際

宴席を好む、江戸学者たちによって、すぐに歓迎会が設定され、昭陽に招待が連絡された。

昭陽も応じて出席するが、その状況を詳細に伝える資料はなく、昭陽の対応にも格別のことはなかったと思われる。亀井家にも記録はない。

次に、昭陽の江戸行と門弟二名を同行しての父著作『論語語由』の出版とその校正は、どのような仕事であるのか、この概略を説明しておく。

まず昔の書物は多くが木版本、これは版本として(多くは桜材)約三厘厚の一枚板を使い、線と字、或は絵柄などを彫り込む。これを紙面に試し刷りしたもので、彫字に誤字、脱字、出来上りの良否を校正する。

その結果の修正は該当する箇所を全部削って除く、その跡に同様材に校正通りの彫りをして埋め込む。その上で再校正という手順を踏む。校正完了の版本は、「出来上り一丁」となる。

『論語語由』の場合には幸いに秋月藩本の初刷りが完全に残っており、これを見ると表紙を別にして本文で三七一丁の版本を校正したことになる。著述の本文もさることながら、

秋月藩主の序文四丁、藩侯世子公の序文四丁についてはそれぞれに字形も大きく書体も隸書(れいしよ)と

し、本文の楷書(一行十六字)に比べ、重で一行十字とし行間も広い。

この両公の序文校正については、昭陽も特別に慎重を期し、参勤の附家老、或は藩主、世子公にも内覧に供したと思われる。

版本校正は、現代の活字使用に比べ、相当の手数と時間を要することは前文に述べた通りである。

一丁の紙は二ツ折りにして綴じるので本の頁数は丁の倍となる。

本書の跋分(本文の後に付ける文章)は家老宮崎舒安撰によって「今茲秋九月……」の書き出しから最終文の「冬十一月」を見ても、三ヵ月の版木段階(この中で校正)から、

刷り、折り、綴じ、冊仕上げまでを後半三ヵ月として参勤期間の六ヵ月は、昭陽らに江戸見物もなかったと推察される。

秋月藩主の江戸参勤は、同藩主が本藩主の幼少に代って福岡本藩の最大公役である長崎警固勤番を幕命によって勤めており、これで参勤の江戸滞在の一ヵ年が六ヵ月に短縮されている。

このため前年九月に参勤出発から本年の四月には帰国できることになる。これに昭陽も同行、帰途は中仙道経由となった。昭陽に従う門弟二

名と奴久八も同様である。

亀井家年鑑の文化四年の項に「四月 日帰自江戸(江戸より帰る)」と記載されるが、日の記入を欠いておる。

昭陽は帰国三日後、秋月に赴き藩主に賜謁しており、その後も暫く秋月に滞在し藩当局者と事務的な処理に当たった。

亀井家年鑑の昭陽帰国記事に次いで「六月廿五日阿母没」と記す。

南冥妻(脇山氏)昭陽に母のことで、没年六十歳である。

南冥は六十五歳で健在、同年作で闊達な書風の七言律六曲屏風を書いている。(文庫所蔵)

以上の昭陽江戸行により父南冥の主著『論語語由』が、秋月藩主によって出版されたことは、本誌前号にも記述しているが、昭陽の江戸行前後の動静を述べるため再稿を重ねた。

昭陽は前年三月、秋月侯に命じられて、秋月藩士の原古処と共に約二年がかりの「西都雅集」とする書画展を太宰府を会場に挙げる。その残務整理を終えて、まもなく九月二十五日に百道を出発、秋月侯参勤の行列に加えられる。これを考えると、この二年

の昭陽は秋月藩士ではないか、と評

能古博物館だより

されるほどである。とくに今回の江戸行きは、父南冥著書を秋月侯による出版という亀井父子が望んでも得られないことであるが、同書の序文を秋月藩主の父子ともどもに加えられ、これらもおよそ他に見られない秋月侯の厚い配慮というほかない。

天明五（一七八五）年、父南冥が秋月侯の召命を得て同藩主の月一回の侍講を勤める際に昭陽も同行「父が本藩の公務に支障の際は、昭陽の代講をお許し願う」として許された。

当時、昭陽十三歳であった。

これらは、本藩の了解を秋月藩が得てのことである。以後、昭陽も若年ながら秋月藩主侍講と同藩校の加勢教授を勤めるなど、既に二十二年を経過している。

本藩は、天明元（一七八一）年、南冥が登用を得た二年後に惜しくも藩主治之公が三十歳の若さで逝去。

次の藩主治高は、襲封わずか六ヵ月で死去、次の斉隆は六歳という幼少のため、同藩家老職の協議制と支藩秋月侯が幕命による後見職となる藩政がつづいていた。しかし、この殿様も本藩主に在位十二年で十八歳の若さで死去。次代の藩侯斉清は生後すぐの一歳という幼児である。

このため、支藩主の長舒公が再度

の本藩後見職、かつ本藩の公役である長崎警固番役（佐賀藩と二年交替）のほか幕命による福岡藩の加役すべて、秋月藩主が代役という事態が、その後も長くつづいた。

江戸参勤から帰国した秋月侯は、九月、本藩の重要公役である長崎警備の巡察に出張する。長崎到着の直後から健康不調が側近の小姓達にも見られたが、これを固く他に秘して巡視をつづけた。帰途に就くと、その容体悪化し秋月に帰還後まもなく死去。享年四十四歳、まだ前途が大いにある名君の急逝である。

同侯の不幸は、昭陽はもとより父南冥共々哀惜尽きなかつた。

文化五年、十一月。昭陽次男の鉄次郎（後に陽洲を号する）出生。文化六年、夏。昭陽は百道屋敷内に書室増築を着工。九月完成。

これを昭陽自ら評して、広きこと弓を容るべし、と。

これは、長州藩からの入門生でよく学力をつけ、昭陽も信頼を厚くして塾頭にする片山子沢（かたやましく）が書室落成の日、部屋中央で弓を高々と強く張り「鳴絃の祓い」を美事にした。この状況が前文の昭陽評言になったことがわかる。

学者の書齋は、訪問の上客と語ら

い欲を交わす。現代の応接室を兼ねるので部屋の造作、その他の置物にも心くばりする。

部屋の室号は、「槃合」（ばんくく）とした。これは、つまらぬ浮世の沙汰を忘れ、己れが楽しむところである、と。

次に、再び片山子沢をして音頭を取らせ、門弟一同と祝宴を張った。

この二日後である。昭陽の組頭から、急ぎの回章があり、烽火台番に就く伝達と申し渡しを受けた。

昭陽は、西学問所の廃校と共に教職を解任、平士（学芸、技術などで仕える武士を家業士と呼び、平士は本来の武士をいう）に替えられ、城代組という一般士の組織に編入されており、組士として従うほかはない。

西学問所の罹災と亀井家屋敷も焼失した後、昭陽は焼け跡を整理して我が屋敷を再建したが、一年おいた二年目の寛政十二年元旦、この新築も再び近所の出火に類焼、再び姪浜の妻実家に仮住まいした。

こうした二度の火難に、昭陽は城下の町並みに住居する災厄を考慮し約九百米の西方に、樋井川を距だてにする百道松原の丘陵台地を選んで居宅と塾舎を新築したのである。

これは、なお終身塾居と在宅拘禁という藩罰がつづく父南冥にも良い環境をもたらし、父は自分の離れ家を草香江亭と名づけた。こうした再度の新築移転から、早や八年を経過、この間に昭陽は城代組士としての勤

役を享和三年から翌々文化二年五月まで約二カ年を城内見廻りと城門警備を勤めただけである。文化二年の後半から同四年四月まで、前にも述べた秋月藩侯の要請によるとされるものの殆ど丸二年を、秋月藩士かと言われるほどに本藩を外にしている。

これらは秋月藩主に幕命による本藩後見役という権限があつたにしても、これに昭陽は決して甘えられるものではない。

この三年間、昭陽にも本藩情報に大いに油断があり、なお城代組士としての本分に自覚が足りなかつたことも事実である。

福岡藩の烽火台設置、これに所要の番士と城代組、この一連のことは藩内にかなり早く情報として取り沙汰されていたと思われる。

烽火台の設置は、佐賀、福岡両藩に於て長崎警固の緊要かつ重大な課題にされていた。その契機は、次の大事件による。

文化五年八月、英軍艦フェートン

能古博物館だより

号が長崎港に侵入、オランダ人二人を捕えオランダ商館の引渡しを強要、港内を自由に測量、これを阻止する奉行所役人を強迫し乱暴するなど、結果は要求物資を無償押収して退去、同港の警備は、佐賀、福岡両藩による年番交替で同年は佐賀藩が当番であった。幕命による警備施設に、小者二、三名を見るだけで藩兵二〇名の駐屯は全く姿もなく、港内係留の装備船も見られない有様であった。これで長崎奉行による出勤命令にも応じられない実情が露呈した。長崎奉行は、英艦退去後、委細を報告書とした後、引責自殺する。

佐賀藩藩主は警衛怠慢により蟄居を命じられた。

こうした事件を教訓に、異国船の入港を迅速に警備諸藩に連絡、また西国諸藩に緊急出動に応じる予告として、長崎奉行による烽火伝達が制定された。この烽火に次いで詳細通知を待機させるのである。これによって小倉藩は福岡藩の石峰山烽火を受けて、大坂城代經由・江戸幕府への急使出発を準備することになる。

長崎奉行に発した烽火は、佐賀藩領の五烽火を通じ、福岡藩の天山(あまやま)がこれを受継ぎ領内の各烽火台が次々作動することになる。

佐賀藩と小倉藩の烽火伝達の「つなぎ」となる福岡藩の六烽火台を伝達順序によって次に示す。

○天山(筑前六宿街道の山家宿の北、290m)

○四王天(四王寺山のこと。太宰府の左手。329m)

○陶羅嶺(しょうけ越と呼ぶ。嘉穂郡筑穂町。峠道の最頂部で400m)

○竜王山(飯塚市の南西。615m)

○六ヶ岳(直方市法華寺の南1K。鞍手、宮田両町との接点となる。339m)

○石峰(若松氏藤木。302m)



『烽火山日記』原本
本題は昭陽自筆

設置された山陵は、いずれも三百米前後と低い。高山は雲霧の障害があり、この程度が支障なしという判断がある。

右の六峰の外に福岡城に伝達する

望楼を城内東南櫓に設置。四王山烽火を見張る烽火番士を詰めさせた。

番勤は、各烽火台共に十日勤務、下番後十日間は自宅に帰り休務する。

なお、各烽火下番は交替の上番士が到着して引継後にされる。

一烽に番士三名組で勤める。終日を間断なく三名が交替で見張り位置に就く。食事給養は、麓村の庄屋による。なお村内一名の烽火台手伝人を命じ、庄屋指図によって配慮する。

番士の入浴も庄屋役による。

番士の勤務往復は、六ヶ岳、石峰は道中一泊、ほか四烽は一日行程。上番と下番共に庄屋に告げること。

参考に、昭陽と城代組その他の状況を少々述べておく。

文化年時の城代組士は、家業士とされる(儒者、御鷹方、御料理人、剣術、槍術、馬医、医師など)を除き、平士と称される一般士二一四人。

昭陽はこれに属し、城代組が平時に就く番勤要員である。戦時は、下士官、下級将校の役に就く。城代組士の下位に就くのが、足軽で約一、二〇〇人、さらに小者とされる一、六〇〇人がいる。烽火台番士は、城代組士の勤番で、足軽、小者には命じられない。

ともあれ、昭陽は烽火台番を熱心に勤めた。

番士の山中生活は、急ごしらえのバラックに等しく、屋根は板と杉皮葺き、壁はすべて板張り、昭陽の作品『烽火山日記』によると、風が強い冬には、雪が板の間から舞いこむ、暖をとる設備はなく、布団を身体に巻き付けて立つという有様であった。

給養に酒がないので、手伝いを勤める村役に頼んで買わせる。鉄鍋に鶏一羽(内蔵と羽を取る)丸ごと終日煮立てながら、その煮出しを竹を切った椀で飲むのが、身体を暖かくして良い。

三名の相藩士は、各烽ごとに相手が変わり、相番の多くは家庭内職を持ち込んでおり、眠る時間と望哨に就く以外は、一心不乱に内職に励むのが痛ましい。昭陽は、本を読むか飯台兼用の机で著述する。書生も訪問客もないので都合である。

ただ、勤務の後半になると、昭陽の状況を知り、わざわざ山を登って酒肴を見舞いに差し入れてくれる。中には書を望むものもあり筆墨と紙を持参する者もある。しかし、すぐには書けないこととなる。下番後には庄屋宅を借りて書くこともある。

番勤に就く往復の途中、入門した元弟子(多くは在郷の医師、寺の住

持)

職、神主、庄屋など村役人もいる)

が待ち受けて、見舞品を貰い、帰りには是非に立ち寄ってほしい、と要請する者も多い。城下を離れると亀井人氣は高く、昭陽の評判も良い。

勤務設備は良くないこと、食べものと、水も変わるという状況で、意外と病気になる。また、口実を設けて番勤を休む者も出始める。

番士に風邪と下痢患者が多いのも事実である。食事給養が良くないことも原因にされる。昭陽は、陣中見舞いとして酒肴が届くので栄養に不足はない。精神的にも爽快で、十日ごとに変化のある近郊旅行に近い気分である。

これは昭陽の健康と状況適応性もあって組士の中で精勤と唯一の皆勤になったとされる。

このため、組頭の注目を得て、烽火番役を終った後も、組頭の信頼が厚く、これは城内の重役にも認識される。昭陽の書は、以前から評判を得ており、かねて亀井家を引き立てた久野、野村両家老からは揮毫の依頼が続いている。

ただ、西学問所の廃校と昭陽らの儒者停止、平士に移されて以来、亀井家に冷めたものが生じていた。

これらは、亀井家よりも藩当局の

意識に生じたものである。

昭陽の烽火台番は、さらに昭陽をして博い見識と経験をさせた。

また、福岡藩士であっても藩領内を詳細に経験する機会は至って少ないことが昭陽に判断された。

郡方勤務という仕事に就いても、担当する範囲は一郡か二郡に過ぎず郡奉行という役職は在宅勤務である。

このため、昭陽の鋭い認識と思わずハッとするような藩政批判が烽山日記に記述される。次号に述べる。

亀井昭陽「烽山日記」(訓読)

本書の原文は全漢文、このため訓読も大変固い文章です。

何卒、ご了承ください。

烽山日記巻上

北筑亀井登元鳳甫著

六岳第一

文化六年、秋八月己丑朔、越えて

丙午。書室始めて成る。広きこと以て弓を容る可し。片山子沢引きて之を落る。名づけて槩谷と曰う。將に人間の事を棄てて我が楽しむ所を考さん。一日を問いて烽山輪番の命

下る。司城の属、之を尸る。是より先、北狄警有り。長崎鎮台、肥(前)、筑(前)に命じて烽を設けしめ、五

伝して我が天山に達し、次は四王山、

次は洵羅嶺、次は龍王嶽、次は六岳

以て東北の石峰に炬し、以て豊(前)に伝う。山ごとに烽子三人、番ごとに十日とす。是の役や、余と丸山利八・善竹次郎なる者と六岳に奔命す。

王事は鹽にする靡く、人を驅ること積の如く、我をして吾が槩む所に従わしめず。長噫して歌いて曰く「羅叉の詫るや、我が倭を嘔尿す。維れは爰麼。嘍囉して魔を為す。羅叉羅又や。吾をして羅に離らしむ」と。

其の翌二十一日、諸生相餞す。その豆觴を治め、各自羞を執る。また吾が党の小四海なり。酒を飲みて楽しむ。二十二日、朝講の後、子沢に囁し、代つて(孔子)家語を講せしむ。

曰く、「儒子をして十日の業を廃せしむなかれ」と。子沢、固辞す。強いて後に可と。子沢は長門の人なり。退讓なるも才氣あり。粥々然として動かすべからざるの概を具ふ。昔、嘗つて余の門に遊び、学成りて帰り擯んでられて萩府の儒員となる。余以て泉次公(山泉周南)また興ると。

諸生に謂ひて曰く「これを敬い、これを勉めよ。子沢を視ること、なお我のごとくせよ」と。辰牌、衙に上る。吏情、山川よりも険し。司城櫛橋子、命じて曰く、「香西庄左衛門、命を受けて烽を巡る。凡百の事は、

これを庄左衛門に詢へ」と。退いて起馬符を司坊哲田氏に取り、遂に箕子街に之き、郵子を戒めて曰ふ「五鼓を以て来れ」と。申牌歸る。飢きこと甚だし。婦氏湯餅を饌して以て待つ。晩食、まさに肉くらふべし。況んや肉を嗜む者をや。大いに嚼いて行を戒め、丙夜すなはち寐ぬ。丁夜すなはち興く。

二十三日、駅馬遅し。俟たずして起身す。庭園の外に呼ばわりて曰く「翌、今発足す」と。家君(南冥)曰く「これ勤めよ。蚤く帰れ、蚤く帰れ」と。敬之、聞可はなお寝む。頂を摩でて別れを告ぐ。友之送りて門を出づ。頼母は抱かれて妻の懷に在り。又、頂を摩すること三たびす。浅海伊八をして提鎧を持ちて先んぜしむ。諸生送らんと請ふ。許さず外人の側目せんことを恐るればなり。子沢及び興膳龔三郎をして駄包を督せしむ。後れて至る。善二を博多に叩ぬれば、則ち丸八もまた其の堂に在り。相揖して行く。子沢、龔三郎、箱崎駅に及く。伊八は防州の人、龔三郎は萩府の賈人の子なり。今、学

に勤むるを以て、郷校に幫補す。駅を出でて、三生と別る。野に帰燕あり、隰に翔隼あり。古人、秋日を哀しむ。我れ豈に木石ならんや。青柳

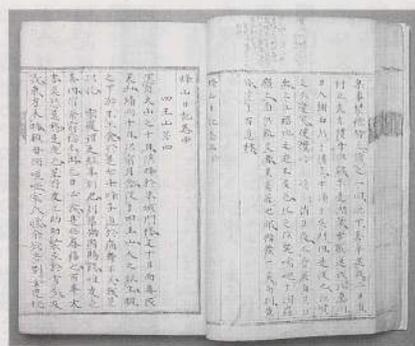
能古博物館だより

駅に小頓し、赤間駅に至るも、日なお高し。前路を問えば、賒なり。乃ち宿す。夜、鷹取宗哲、酒及び鶏蛋を貽る。飄風は屋を憾かし、忽ち一詩を得たり。曰く、「驚風永夜を吹き、莠屋乗船に似たり。我れ酔うて心飄蕩す。飲中賀仙を懷ふ」と。

二十四日、駅券を以て麻長に命じ、馬隸轎奴を戒むるに、戌夜を以てす。卯牌、方に来る。之を詰れば、則ち曰く、「遠邨の耕戸なれば、狗走すること三里なり」と。余、之が為に愍然たり。行くこと里許り。郷丁、一逕を指さして曰く、「捷の速かなるあり。請ふ、是より行かん」と。

二生、速やかならんことを欲し、喜んで之を頷ふ。余、その熟路にあらざるを知り、之を難んずれども、可かず。乃ち行く。既にして晴勝三つに又る。之を耕夫、藁子に問うに、衆言異なれり。或は百歩にして止まり、或は五十歩にして反る。芒乎として裏城の七聖なり。時に丸八は箒に坐し、善二は馬に踞し、俯仰して商議す。余曰く「官命を抱きて王事に赴くに、役夫に誑かれ、以て其の期を愆らば、何を以て復命せん。足下、徐ろに之を究めよ」と。僕走らんと請ふ。乃ち反りて大路に出づ。駿奔りて新入邨に入る。日影を顧る

に、未だ桑野に至らず。失はずんば何ぞ得ん。遂に保長宗次の宅に入り、庄左衛門に会す。辨嚴なれば、まさに発せんとす。余、與偕に六岳に陟らんと欲す。庄左エ門曰く「僕、先行す。公は徐々にして可なり」と。乃ち、雙刀を税して休む。二生も亦趕及く。郷丁頗る余に怖勢有り。余は笑つて曰く「拙者をして道に失



『烽山日記』原本

ふの憂を無からしむは、焉んぞ軍学の師に斯に見ふを得んや。汝は我が好道引なるのみ」と。皆、磕頭して謝す。午牌乃ち出ず。邸の甲頭、引路す。余が脚は弊散す。足底に袍を生ず。阪を陟ること天に陟るが如し。山民の荊榛を作りて家する者あり。笠を撤げて之を覘ふに、故障に李白の客中行を書す。字々傀儡にして、

王山隕れんと欲す。老叟清作なる者あり。年七十。曰く、「是れ二十年、前、亀井主水君、金崎に遊び、酒間に賜ふ所なり」と。之を視れば家君の図印昭然たり。関防(印)に「氣万丈の虹を吐く」と曰ふ。尊名は陰文、尊字は陽文。三類は皆、小野英元の篆刻する所なり。余曰く、「山に靈あり。榛蹊の中、我が父に邂逅せり」と。叟、驚きて曰く「官人は是れ豈太郎君か。君の書も亦、閣板上に蔵せり」と。既にして嘆じて曰く「堂々たる高士、一に何ぞ卑しきなるか」と。新泡茶二甌を啜りて出ず。是より盤道益々峻しく、羊腸逆折、皆茅苴を莠り、礪磔を剔り、新に墜して通ずる者なり。脚、吾が脚に非ざるに似たり。雲に縁りて上征し、氣を作して嶺を踏み、遂に烽火台に割る。庄左衛門、其の弟子、木全半五と、まさに士丁数十人を指麾し、烽燧を営み、望管を竄く。烽燧二あり。方二丈有半、薪草を溼積して之に屋す。茅葺の四阿、埤の外は、竹を以て落とす。望管は、南北の烽を巡察する所以にして、夜を主とる器なり。渾天儀に窺管望筒あり。蓋し因りて以て名を取る。八角の堅木を以て之を造り、銅もてその兩端を鈴し、鉦に迫りて照門を安ず。孔中

を眇看するに、準を取ること鉄砲の前後星の如し。牀を製して之を叉む。庄左衛門、管を以て二烽の所置を示すに、沫の如し。曰く「直指し三里を同じくして、星の餘は、石峰、龍王に加なる。その幽くして明らかならざる、また宜なり」と。余、庄左衛門に告げて、司城の言を以てす。庄左衛門、曰く「烽制未だ定まらず。定まらば、当に告諭を陳臬すること有るべし。僕又何をか言わん」と。余曰く、「官長、予に命じて日曆を録せしむ。これを録せんか」と。半五日く「告示未だ来らざれば、録せずして可なり」と。余、これがために惘然たり。寅弟に謂ふ、「草創の勢、戒命一ならず。我、まさに唯々として以て我が所を成さんのみ」と。夜、嵐氣人を襲う。丸八、鉸刀を以て紙を剪り、縷の如く採斂して之を續く。之に問へば、曰く「婦りて、歴鹿車を以て之を紡ぎ、以て棉布の緯となす」と。善二、吟嚙、口に矜へず、人をして寐を失せしむ。

二十五日、築削未だ歇まず、秋山市の如し。余、この日、先妣の月忌たるを以て、独り惆悵して詩を作り情を抒ぶ。曰く、「行役、深山に宿し、山寒く骨朽せんと欲す。晨に興きて白雲を攀ず。何れの処にか吾が

淡窓亀井塾入門見聞録(下)

母を望まん。」余、毎月忌、霊牀を堂に設け、諸生を会して祭事を修む。且つその仏乘に帰せしを以て、必ず禅子大匠を請ひ追薦す。若し故ありて闕かば、師必ず展墓して経を誦し是を行ふなり。友之に囑して、月忌を致し、師に清酌せしむ。事を撫して感じ、又一詩を得たり。曰く「夢に驚いて曉鳥を聞く。疑うらくは是れ妙経の声なるかと。昨夜幽丘の雨匡公の古を弔いて行く。」、監工の史、富水源五、付子を以て諸物件を致す。領状を書し之に与ふ。

二十六日、鼙鼓鳴らず、山禽人に傲る。夙に興きて戸を多く。連峰屏列し、岡巒、その中に平俯す。北豊の山と穴門の遥碧と、左右に衡視して、飛鷺皆その背を觀せる。崢嶸たるかな。この境や。吾れ一詩友を携え來らしめば、樂しみ如何ぞや。我惠張を褰ぎ、雲に臥す者を聞くも、未だ噲等を伍して山に坐する者を聞かず。また変れり。養子文五郎、腰扇三把を捧げて字を需む。丸八曰く、「坂に桶栗多ければ、撥ふべし」と。善二と皆行く。乃ち齋し來れる所の『辺要分界図考』を出して、之を讀む。これ近藤守重の著す所なり。秋府の紫溟宮大夫、遠く寄せて余に示す。実に防辺の秘秩なり。

能古博物館だより

(7) 第 19 号

予是年九月上旬ヲ以テ、又筑ニ赴ク。家ヲ発スルトキ、筑後古川ノ醫師諫山元静ト云フ者カ、古川ニ帰ルニ同行。彼ノ地ニ至レリ。元静ハ南冥先生ノ門人ナリ。

淡窓の原文はすべて片仮名づかいである。前号から引きつづき、後半を掲載する。例によって、とくに亀井塾と関係のない記事は消除。以下本文、時は寛政十一年、淡窓十八歳である。

予是年九月上旬ヲ以テ、又筑ニ赴ク。家ヲ発スルトキ、筑後古川ノ醫師諫山元静ト云フ者カ、古川ニ帰ルニ同行。彼ノ地ニ至レリ。元静ハ南冥先生ノ門人ナリ。

予三三年來病多シ。此年ノ冬ニ至ツテ、稍ク甚シ。一身ニ熱ヲ生シ、潮熱ノ症ナリ。自汗盜汗アリ。其症勞瘵ニ似タリ。是ニ於テ心中ニ恐レヲ生ス。傍ノ人モ皆家ニ歸リテ保養スルニ如カジト云フ。是ニ於テ、十二月上旬。彼ノ地ヲ發シテ故郷ニ歸レリ。是レ即大婦ナリ。予十六ノ春ヨ

淡窓の原文はすべて片仮名づかいである。前号から引きつづき、後半を掲載する。例によって、とくに亀井塾と関係のない記事は消除。以下本文、時は寛政十一年、淡窓十八歳である。

予是年九月上旬ヲ以テ、又筑ニ赴ク。家ヲ発スルトキ、筑後古川ノ醫師諫山元静ト云フ者カ、古川ニ帰ルニ同行。彼ノ地ニ至レリ。元静ハ南冥先生ノ門人ナリ。

予三三年來病多シ。此年ノ冬ニ至ツテ、稍ク甚シ。一身ニ熱ヲ生シ、潮熱ノ症ナリ。自汗盜汗アリ。其症勞瘵ニ似タリ。是ニ於テ心中ニ恐レヲ生ス。傍ノ人モ皆家ニ歸リテ保養スルニ如カジト云フ。是ニ於テ、十二月上旬。彼ノ地ヲ發シテ故郷ニ歸レリ。是レ即大婦ナリ。予十六ノ春ヨ

術ヲ以テ之ヲ鼓舞シ、止メント欲スレトモ、能ハサラシム。其ノ教導ノ術、実ニ抑揚測リ難シ。要スルニ、其ノ人ヲシテ、噴発踴躍、自ラ止ムコト能ハサラシムルニ在リ。予ハ門ニアルノ日少クシテ、教ヲ受クルノ日浅シ。然レトモ、先生父子、之ヲ他方ニ悠揚シテ、遠近ニ施セリ。固ヨリ龍門ノ一言ハ常人、千言萬語ニモ勝レリ。況ンヤ、其力ヲ極メテ悠揚スルニ於テヲヤ。

予、今日微名ヲ僞ム者ハ、皆ニ先生(南冥・昭陽ヲ云フ)ノ賜ニアラザルハナシ。其ノ恩遇ハ、終身随從スル者ヨリモ勝レリ。

予三三年來病多シ。此年ノ冬ニ至ツテ、稍ク甚シ。一身ニ熱ヲ生シ、潮熱ノ症ナリ。自汗盜汗アリ。其症勞瘵ニ似タリ。是ニ於テ心中ニ恐レヲ生ス。傍ノ人モ皆家ニ歸リテ保養スルニ如カジト云フ。是ニ於テ、十二月上旬。彼ノ地ヲ發シテ故郷ニ歸レリ。是レ即大婦ナリ。予十六ノ春ヨ

能古博物館だより

テ、之ヲ避ケタリ。予ト同座ヲ嫌フコト、甚ダ以テ憎ムヘシ。我カ鉄如意ヲ以テ之カ頭ヲ碎カント思ヘトモ、役ハ三百石ヲ領シタル官人ナリ。コノ故ニ敢テセス。但シ此人ノ家、一年中ニ葉ヲ乞フモノ一人アルコトヲキカズ。故ニ大禄ヲ食ムト雖モ、家計困窮シテ、借財山ノ如ク、カケ乞ヒノ者ノミ、日々門ニ満テリ。後生必ス此人ヲ以テ戒トスヘシト云ツテ、呵々大笑シテ座ヲ立タレタリ。

相良梅岡、後年京師ニ至ツテ、小石元俊ニ見エタリ。元俊ハ独嘯庵ノ門人ニシテ、南冥ノ親友ナリ。梅岡ト語ルウチ、南冥ノ事ニ及ヒシニ、元俊カ曰ハク、道戴(南冥ノ字名)ヲ京師ナトノ儒者ト、一様ニ思フヘカラス。真ニ猛虎ノ如クナル者ナリトゾ。其若カリシ時ノ豪氣、想像スルニ堪ヘタリ。

昭陽先生ハ、氣象豪邁ニシテ、父ノ風アリ。慷慨ノ氣尤モ厲シ。然レトモ、其父細行ニ拘ハラシテ、罪ヲ得タルニ懲リ、矯飾シテ己ニ克テリ。孝弟ニ至リテハ又天性ニ出テタリ。生涯娼妓ノ類ニ近ツカス。二色無キニ近シ。後年、父ノ喪ニアリ、水漿口ニ入ラサルコト三日、服喪三年。哀毀骨立セリ。我国ハ三年ノ喪ニ服スル者鮮シ。貝原先生ノ篤行ナ

ル、三年ノ喪ハ邦人ノ勝フル所ニ非ス。国制ニ因ツテ、一年ノ喪ヲ用フヘシト言ハレタリ。然ルニ是ノ人ノミ、断然トシテ古道ヲ行ヘリ。其ノ人ヲ教フルコト、鼓舞抑揚ノ術、又父ノ風ニ倣ヘリ。然レトモ、門ニ才子ノ多ク出テタルコトハ、其父ニ及ハス。惺悌(やわらぎ楽しむこと)ニシテ、人オヲ受スルコト、又父ノ風アリ。然レトモ、昭陽ハ能ク文人書生ヲ容レテ、世俗ノ人ヲ容ルコト能ハス、其門人ヲ愛スレトモ、他方異学ノ人ト交ルコト能ハス、人ソノ度量父ニ遜ルコトヲ評セリ。或人ノ評シテ、昭陽ノ行事、未タ十全トハ云フヘカラス。其孝友ニ厚キコトト、女色ニ廉ナルコトノ二事。是ヲ顔曾再閱ノ際ニ置クト雖モ、又愧ツルコトナシト云ヘリ。

大壯ハ、兄弟ノ中ニ於テ、其性度頗ル寛裕ナリ。初メ僧トナツテ、叔父曇栄ノ弟子タリシカ、其意ヲ失ヒ還俗シタリ。是ニ因ツテ、叔姪終身不通(叔父、甥が終生音信せず)ナリ。其ノ才学、医術ハ少シク弟大年ニ遜レリ。是人、予ニ於テ極メテ親シ。其ノ甘木ニアルトキ、予往来ニ付キ、屢々投宿セリ。後年、予病ニ有ルニ及ンデ、又来リ問ヘリ。其事後ニ出セリ。

大年ハ、英氣最モ厲シ、天性簡傲ニシテ、禮節ニ堪ヘス。十九歳ノ時ヨリ、姪ノ浜ニ別居シ、医ヲ事トシ、ナホ専ラ商賈屠博ノ徒ト交ハレリ。士大夫ヲ見ルコトヲ悦バス。常ニ曰ク、我レ袴ヲ着タル者ヲ喜ハス、是同席スルコト能ハスト。

予六、七歳 始テ句詠ヲ授カリシ時ヨリ、南冥先生ノ名ハ耳ニ轟キタリ、既ニシテ江上、山口ノ二子、龜門ノ冠タルコトヲ聞キ、其ノ後ニ隨ハンコトヲ願ヘリ。其後、藤左仲ニ逢ヒ、委シクカノ中ノ事ヲキキ得タリ。其時ニ、昭陽先生ノ名、マサニ起リ、原震平ノ詩名マタ噪ケリ、南冥先生ハ毎々二子ヲ並ヘ称セラレタリ。子カ筑ニ遊ヒテ後ハ、大壯、大年カ名モ降々トシテ起ル。南冥先生ノ詩ニ云ヘルコトアリ。屈指文章士。関西僅有徒。我家三大子。古

処一狂夫ト時ニ四子ノ名方ニ盛シナリ。予ガ輩後進ノ者ニ至ツテハ、昭陽先生ヲ見ルコト、猶天ノ及フヘカラサルカ如シ。只、他ノ三子ヲ慕尚シテ、之カ流亜タランコトヲ願ヘリ。後ニ南冥先生、予ヲ称シテ、三兒ト原古処ニ次テ起ルモノハ、是ノ子ナラント。

予、筑ニ在ル中、二先生ノ親友ニ見知りタル人多シ。佐藤清蔵アリ、南冥ト親シ。南冥詩文ノ中ニ多ク見エタリ。青木治右エ門ハ、南冥ノ弟ニシテ、昭陽ノ親友ナリ。蘭学ニクワシ。小野一右エ門、町田藤太夫ナト時々塾ニモ往来アリ。是ハ西学ノ生員ナリ。又高原玄龍ト云ウ人アリ。少年ニシテ詩ヲ能クシ、書ニ長セリ。予モ頗ル相熟セリ。此人官医ニシテ二百石ヲ領セシカ、亡命シテ家絶エタリ。後ニ聞キシニ、姓名ヲ変シテ箕周策ト称シ、筑ノ鄙ニ隠レタリトソ。其弟ヲ友吉ト云フ。是モ予ト相知レリ。(中略)

十八歳ノ冬ニ至ツテ、姪ノ浜ニ在リシニ、書林ヨリ唐宋詩醇ヲ持チ来レリ。大年是ヲ求メタリ。予始テ此ノ書ヲ見ルニ、李杜韓白蘇陸ノ六家ノ詩ヲ選ヘルナリ。予幼キ時ヨリ、師説ニ因リテ、宋詩ヲ見ルコト魔道邪法ノ如シ、是ニ至ツテ唐宋並ヒ称スルヲ見テ、大イニ怪ミ訝レリ。時

二南冥先生方ニ詩醇ヲ讀ミ玉ヘリ。予、先生ニ問テ曰ハク、詩醇ハ、李杜ヲ除キテ外ニ見ルヘキ詩アリヤ。先生ノ曰ク、六家ノ詩、才力相敵セリ。但シ白樂天ハ平弱ニ近シ。五子ニ比スレハ、稍劣レリ。東坡ノ詩、奇拔、韓詩ニ超エタリ。但シ、古詩ヨシ。予是ニ於テ恍然トシテ詩道ノ廣大ナルヲ悟レリ。

予、筑ニ在ル中、二先生ノ親友ニ見知りタル人多シ。佐藤清蔵アリ、南冥ト親シ。南冥詩文ノ中ニ多ク見エタリ。青木治右エ門ハ、南冥ノ弟ニシテ、昭陽ノ親友ナリ。蘭学ニクワシ。小野一右エ門、町田藤太夫ナト時々塾ニモ往来アリ。是ハ西学ノ生員ナリ。又高原玄龍ト云ウ人アリ。少年ニシテ詩ヲ能クシ、書ニ長セリ。予モ頗ル相熟セリ。此人官医ニシテ二百石ヲ領セシカ、亡命シテ家絶エタリ。後ニ聞キシニ、姓名ヲ変シテ箕周策ト称シ、筑ノ鄙ニ隠レタリトソ。其弟ヲ友吉ト云フ。是モ予ト相知レリ。(中略)

化儉草 吟行俳句会

(平成五年十一月十二日)

能古島吟行 講師 永田 蘇水

○寂びる景深めゆく冬壇旧居 永田 蘇水

○いつの日の 枯葉石棺埋めつくし 中平しづ子

○笹子鳴く万葉歌碑に石棺に 江洲とし子

○碧空を画布とし榛の実の構図 中村 和子

○石棺と 聞けばそれらし落葉かな 宇野 和子

○古き世の墓海を向き枯葎 広沢美智恵

○この丘の笹子人影気にもせず 飯尾むつ子

○これよりの 島は寂しや石路は黄に 梶原登喜子

菜穀火俳句会

(平成五年十二月十二日)

野見山ひふみ選

○冬晴や渡船といふも五六分 澄 江

○冬灯一室に濃き廻船史 壽美子

○南冥の晩年不遇枇杷の花 梢

○年歩む古窯の火狭間むらさきに すみ

○能古窯の火穴枯野の風通ふ 洋子

○枯るもの枯れて未完の孔子廟 さわ

○碧落に冬芽かがやく蟹の婚 美知子

○接岸の正面に燃え冬紅葉 志津子

○浜牡蠣を割りて少年探検隊 公彦

○冬椿色濃く咲かせ一雄の碑 恵美子

○一戸減り一戸が増えて島の冬 蓬頭

姪浜川柳会 新年句会

○魚市場

初荷祝儀に鯛がはね

○祝い酒 初荷の馬も千鳥足

○コンテナに 初荷職は忘れられ

○すっぽりと 初荷呑み込む門構え

○食卓を 初荷で飾る松も明け

○「カー」不況 赤字初荷旗靡かない

○輸入米 初荷の中で国自慢

○不況風 初荷に訓示聞かされる

○パッシング 日本へ米の初荷来る

○勇み立つ 初荷の馬車を過去の絵に

○酌いてつがれて 男に通うものがある

○一木一草と マタギ語り合う

○自分史が あの居酒屋に置いてある

○通学路 通草も茱萸もあつたつけ

杉原 新二

浜野信一郎

山口由利子

糸山好太郎

吉原たみ子

新原 光男

蔵田はつよ

今磯 好啓

吉原 湖水

森 志げる

原口 虎夫

富永紗智子

石井 清勝

墨 羊子

○免停が痛い通勤定期券
○春の音盲導犬と聞きに行く
○雅子妃に
抱かれた日などシヨコラふと

○正月の小言は溜めて十日過ぎ

○蟬涙の切なさ胸にしみてくる

○強がりが
ときどき涙捨ててに行く

武藤 瑞こ

末松仙太郎
寺中三枝子

野田 はつ

福永 光子

原 敬道

石本あかね

板本 継生

大山 宇一

高木千寿丸

吉富とき代



武藤 瑞こ

○甘口の酒も言葉も酔いやすい
○エアロビクスに
通った効果妊婦服
○狛犬に軽い会釈を初詣で
○ストレスが
吠え癖に出る座敷犬
濡れ犬を
拾い太郎も濡れている

文庫聖堂講座の題目について解説

○『論語』

孔子とその門人たちの言行、孔子と門人や政治家などとの対話を中心に記録した書物、孔子の教えと、彼を祖とする儒家の思想とが端的に理解できる。もっとも基本的な文献である。

孔子は、春秋時代の思想家、教育者。紀元前五五二年に生まれ、前四七九年、七十四歳で没した。

父は魯の大夫に仕えた武將、孔子が三歳のとき没した。貧賤のうちに育ったが、向学心に富み、魯の伝統文化に習熟した。三十歳を過ぎるころから多くの門人を集めて教育し、学問集団を結成した。

魯に仕えて大いに治績をあげたが、その思想は用いられなかった。

五十六歳のとき諸侯遊説の旅に出たが、十四年後帰国した。以後は専ら門人の教育にあたり、また『詩』・『書』など古典の整理編集に力を注いだ。

孔子にはじまる儒家の思想は、全漢の武帝(紀元前一四一〜八七)の時に国教と定められ、以後、中国思

想界の主流を占めている。日本に最初にもたらされた漢籍も本書であり(三七〇年代)日本の精神文化に大きな影響を与えている。

本書には、孔子が晩年になって生涯を振りかえった貴重な文章も収められている。次の一部をあげる。

子曰く「吾 十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順(みみしたがふ)。七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず」と。

(注)すでに、ご存じの方も多いためと思いますが、ご了承ください。

○『史記』一三〇巻

全漢 司馬遷 撰。中国古代の黄帝から漢の武帝(西紀前七五〇年頃)に至る事蹟を記した紀伝体の正史。

日本人の思想、言語の面に多分の影響をうけた。著者の司馬遷は、孔子が書いたとされる。『春秋』を史学の模範とした。よって史書は、単なる事実を記すものではなく、事実を通して倫理的価値判断を示すもの

亀陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子④・西嶋洋子④
岡部六弥太④・村上靖朝④・星野万里子④
小田一郎②④・村川雪江④・速水忠兵衛①④
財部一雄④・桑形シズエ④・上田紀子④
安松勇一④・宮徹男①④・上田良一④
西村忠行④・高田浩二④・片岡洋①②④
桑野次男④・玉置貞正④・石川文之④
木戸龍一④・西島道子③④・原重則②④
石橋七郎③④・藤木充子④・和田慎治④
西川真澄④・藤仙太郎④・板木継生④
行成静子④・鬼塚義弘④・坂田泰滋④
橋本敏夫④・三宅碧子④・山内重太郎④
星野金子④・中畑孝信④・吉原湖水④
岩重二郎④・横山智一④・宮崎集④
岡本金蔵④・青柳繁樹④・都筑久馬④
岩下須美子④・斎藤拓④・吉村陽子③
石橋観一④・桃崎悦子③・西政憲③
林十九楼③・大神敏子③・安永友儀③
磯崎啓子③・土屋正直③・三角健市③
織田喜代治③・上田彦③・鶴田スミ子③
西尾健治②・伊藤康彦②・石橋清陽②
塚本美和子②・長八重子②・黒川松陽②
寺岡秀實②・柳山美多恵②・日野和子②
隈丸清次②・奥田稔②・原田種美②
岸洋子②・古賀清子②・荏山雅敏②
前田静子②・田中和子②・松塚善郎②
野口隆②・長尾茂穂②・肥塚治郎②
川島貞雄②・井上敏枝②・平河渉②
石村マツノ・藤野幸子②・富重芳子②
葉山政志②・星野玄②・半田耕典②
久芳正隆②・藤島正稔②・福田満須美②
原口虎夫②・吉富と一②・児島順子②
野田はつ②・大山宇代②・丸尾好幸②
原敬道②・鶴田俊隆②・丸尾好幸②
荒巻重義②・高木千寿丸②・武藤瑞こ②
富永紗智子②・森志げる②・林千代子②
浜野信一郎②・糸山好太郎②・山口由利子②
墨羊子②・木原光男②・森本憲治②
(前原市) 由比章祐④・(大野城市) 伊藤泰輔④・田代直輝④・山田栄

- 執行敏彦・久野敦子・(春日市) 後藤和子④・白水都・(筑紫野市) 横溝清④・脇山浦一郎④・川浪由紀子④
原富子③・(太宰府市) 中村ひろえ④
佐々木謙④・古賀護二③・平岡浩③
西尾弘子③・木松祐和④・蔵田はつよ④
(筑紫郡) 精城慎也①④・(粕屋町) 神崎憲五郎④・榎田正己④・榎田猶子④
酒井俊寿③・青木良之助④・友野隆④
松本雄一郎③・鈴木惠津子②・川原敏子④
長崎栄市・井手伽維子・(甘木市) 木村秀明③・益尾天嶽③・(宗像市) 佐野至④・酒井カツ④・宮崎春夫④
黒川邦彦④・井手太④・井上清④
田中トクエ③・富田英寿③・(朝倉郡) 鬼丸雪山④・山崎エツ子②・(飯塚市) 小山元治④・(浮羽郡) 吉瀬宗雄④
(大牟田市) 嶽村羽④・古賀義朗④
(筑後市) 中島栄三郎②・(苅田町) 木下勤④・(北九州市) 片桐三郎④
平野巖④・(久留米市) 庄野陽一④
(柳川市) 樺島政信・(直方市) 山本利行③・(佐賀県) 甲本達也④
(大分県) 寺川泰郎④・(日本政策) 濱北哲郎④・(山口県) 大塚博久③
(長崎県) 浦上健③・(熊本県) 松村浩二・(滋賀県) 辻本雅史
(愛知県) 杉浦五郎③・(庄野健次③) (神奈川県) 中野學子②④・(林田) 睦
(東京都) 片桐淳二④・(山根貞与②④) (東京市) 片桐淳二④・(千葉県) 村山吉廣②・田中加代・(千葉県) 森久④・(埼玉県) 関所ひさ③④
(石川県) 丸橋秀雄③・(宮城県) 田中信彦③④

【協賛会会員(個人)】

- 片桐寛子(福岡)④・中村登(福岡)④
大里豊男(福岡)④・広瀬忠(福岡)④
笠井徳三(福岡)④・早船正夫(福岡)③
菅直登(福岡)④・梅田一雄(福岡)④
荒木靖邦(福岡)④・野田光治(福岡)④
浄満寺(福岡)④・永田蘇水(福岡)③

とし、これによって後世に残す価値ある人物のみをとらえ、その選定を自由な発想によった。このため、利殖に成功した人物、また侠客といった者にも価値を認めた。人間の運命に対する強烈な感心と豊かな表現力は、本書に優れた文学性を付与している。これらが『史記』の永遠といえる評価をもたらし、かつ愛読される所以とされる。

○『老子』上下二編 計八一章からなる。

老子の思想は、儒家的な人知、人為に価値を認めない。無為自然を強調して、太古の素朴な原始農村共同体を理想する。これを貫くものは、現実逃避主義であり、しかし一面では、リーダー、天下に王となる方法など逆説的に説いて、積極的な姿勢を示すという。

著者とされる老子の伝記は全く不明であり、おそらく、道家的な学説が積み重ねられ、伝え継がれて、老子という一人物に仮託されまとめられたものとされる。その成立は、中国の戦国時代末から漢代の初めといわれる。

『史記』によると、老子は楚の苦県瀉郷の曲仁里に生まれ、姓は李、

名は耳且、字は聃、周王朝の図書館で司書をしていたが、王朝の衰微を嘆いて、都を去って、ことへもなく立ち去った。途中、関所の役員に請われるままに『道德経』五千言を書き残した、ということになっている。老子の思想は、次の荘子に受け継がれ、老荘思想とも叫ばれる。中国はもとより、日本でも広く愛好される書である。

○『伝習録』三卷

明代の儒教哲学者「王陽明」が弟子たちと問答を弟子の「除愛」による集録を土台に、王陽明の著述、語録、書簡等を加えて編纂された書。朱子学の『近思録』と並んで陽明学の教本として江戸時代よく読まれた。中江藤樹、熊沢蕃山、大塩平八郎らの実践的思想となった。

講師の柴田先生に、次の質問をいたしました。

▽維新の英雄「西郷隆盛」は、本書をよく読んだと伝えられています。が、

○「それは、事実のようですね」

▽大久保利通は、いかがでしょうか……

○「サア、どうでしょうか」と。

大坪正治 (福岡) ③・奥村宏直 (福岡) ③
安陪光正 (福岡) ③・沖 双葉 (福岡) ③
七熊澄子 (福岡) ③・熊谷雅子 (福岡) ②
上田 満 (福岡) ①・亀井准輔 (福岡) ③
木原敬吉 (飯塚) ③・具嶋菊乃 (甘木) ①
久保津智夫 (嘉穂) ④・庄野直彦 (直方) ①
原田國雄 (宗像) ④・森光英夫 (唐津) ②
西喜代松 (共済) ②・中山重夫 (唐津) ③
緒方益男 (佐賀) ④・七熊太郎 (佐世保) ④
七熊 正 (佐世保) ③・浦上 健 (長崎) ①
小堀定泰 (滋賀) ④・伊藤 茂 (神戸) ④
西村俊隆 (東京) ④・白水義晴 (東京) ④
多々羅幸男 (千葉) ③
会員ご氏名に④は、会費ご継続四年目をいただいたしるしです。
(一)は多年分のまとめお払い込み、()は増口数ご負担を示します。

【法人協賛会員および特別協力法人】

- 九州 電力 株・大野 茂 (福岡)
- 新 出 光 出光 (福岡)
- 出光興産福岡支店・山本繁弘 (福岡)
- 福岡中央銀行・山本敬一郎 (福岡)
- 南川 勝三 (福岡)
- 日本製粉株福岡工場・白尾嘉弘 (福岡)
- 福岡県警備業協会・村上五一 (福岡)
- 流通 共 済 株・花田積夫 (福岡)
- タイム社印刷 株・安部博満 (福岡)
- 株 笠 組 忠 夫 (福岡)
- 博多ちくわ 株・松尾嘉助 (福岡)
- 権藤税理事務所 株・権藤成文 (福岡)
- 協 通 配 送 株・富安 渡 (福岡)
- 大牟田運送 株・南誠次郎 (福岡)
- 株三島設計事務所 株・三島庄一 (福岡)
- 株 日 西 物 流 株・原 重則 (福岡)
- 西日本急送 株・原 重則 (福岡)
- 愛宕建設工業 株・野村六郎 (福岡)
- 南愛光ビルサービス 株・野田和禧 (福岡)
- 南クリーン開発 株・野田和禧 (福岡)
- 延 寿 産 業 株・池田邦夫 (福岡)
- 九州三菱、そう自販 株・宮崎慶一 (福岡)
- 南安河内商店 株・安河内紀男 (福岡)
- 木原税理事務所 株・木原敬吉 (飯塚)

※新規の御加入(先号以後、平成六年一月三十一日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。
ありがとうございます。

能古博物館の会

協賛会(個人)年間1万円
〃〃(法人)年間3万円
館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける

郵便振替口座の変更
平成6年5月より
(旧)納入方法 郵便振替 福岡3160970
(新)納入方法 郵便振替 0130196090
財団法人 能古博物館
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。
【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

『閨秀 亀井少梨伝』

図書出版
詩、書、画の作品で仙居の次に多いのが同時代の亀井少梨。しかも少梨には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。
B5版・表紙布装美本
限定一、〇〇〇部
図録全カラー50頁・本文94頁
直売頒備 三、〇〇〇円
(送料 三二〇円)

亀陽文庫聖堂記念講座の解説と

受講参加のおすすめ

お陰さまで各社および皆様の御支援を
いただき文庫収蔵「孔子像」を聖堂に安
置いたします。また、聖堂付設の講堂建
設を予定しております。

これらによって亀陽文庫が多年の懸案
にする「中国哲学」講座を次の通り、来
たる四月一日から開講します。

講座科目と日時

- 論語 四月第一週の土曜
- 老子 " 第二週 "
- 史記 " 第三週 "
- 伝習録 " 第四週 "
- 特別講座 右の常設講座のほか招待
教授による集中講義に御参加できま
す。

右の科目を来年三月まで(八月を暑中
休暇とする)毎月、毎週土曜を右の科目
順で時間は、各講座とも午後一時三〇分
を定時に開講、三時終了の予定。

講座担当講師名

- 論語 九州大学文学部教授 町田三郎
- 老子 " 教授 福田 殖
- 史記 福岡教育大学教授 菰口 治
- 伝習録 九州大学文学部助教授 柴田 篤

受講者の資格

高校終了以上で年齢七十五歳まで
もとより女性受講可

受講料

年額金(一講座に付)一一、〇〇〇円
受講申込時に前期(4、8月)

五、五〇〇円納入

後期分は同額を九月受講日に納入

受講定員 三十五名

科目併修は二科目まで

各科目とも定員次第に〆切

◎御希望の方は早目にお申込み下さい。
定員なり次第に〆切



受講交通と便益

姫浜市営渡船12時15分御利用
能古着同25分、館まで徒歩5分
中食 四〇〇円(館内食堂)

付設講堂の内容

教師室・受講席36名・図書室・洗面所
開講前未完成の場合は
本館研修室を利用

欠講と補講

講師ご都合で欠講の場合は補講日時を
設定、お知らせします。

文庫「孔子聖廟」創建

御寄付芳名

- 大牟田運送 楠南 誠次郎
- 楠新出 光出 光
- 協通配送 楠富安 繁
- 出光興産福岡支店 山本 弘
- 南川整形外科病院 南川 勝三
- 西日本急送 楠原 重則
- 日西物流 楠原 重則
- 木原税理事務所 木原 敬吉
- 楠福岡銀行 佃 亮二
- 権藤税理事務所 権藤 成文
- 九州三菱ふそう自販 宮崎 慶一
- 福岡流通警備保障 村上 五郎
- 楠福岡中央銀行 山本 敬一
- 日本製粉楠福岡工場 白尾 嘉弘
- 株信 和 小田 一郎
- 箱崎ユーティリティ 株 和 小田 一郎

御寄付者芳名(本誌出刊現在)

- 【金拾壹万円】 原田 國雄
- 【金拾万円】 和田 慎治・早船 正夫
- 上田 満・庄野 寿彦・片桐 寛子
- 安松 勇一・溝口 博義
- 【金八万円】 翠川 文子
- 【金五万円】 今林 昇・安陪 光正
- 笠井 徳三・大久保津智夫・石橋 鏡一
- 結城 進・花田 積夫・中山 一三
- 松尾 清美・南 誠次郎
- 【金叁万円】 森光 英子・西 政憲
- 具嶋 菊乃・酒井 カツヨ・井手 太
- 井手 親栄・伊藤 茂・吉瀬 宗雄
- 中山 重夫・井上 清・肥塚 善和
- 木下 勤・荒木 靖邦・神崎 憲五郎
- 斎藤 拓・寺川 泰郎・住吉 啓一
- 上田 博・野見山 薫

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜日が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月3日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881

- 【金貳万円】 江崎 正直・井手 ゆうじ
- 村上 五一・足田 文五郎・吉松 一成
- 丸橋 秀雄・庄野 健次・上田 良一
- 浦上 健・岩下 須美子・松本 修一
- 庄野 陽一・山中 耕作・神田 正明
- 【金壹万円】 西尾 健治・片岡 洋一
- 村山 吉廣・星野 玄・甲本 達也
- 吉原 湖水・黒川 邦彦・佐野 至
- 宮崎 春夫・桑形 シズエ・大里 豊男
- 辻本 雅史・花村 信也・橋本 敏夫
- 末松 仙太郎・青柳 繁樹・小山 元治
- 富田 英寿・板木 継生・大塚 博久
- 荘山 雅敏・桑野 顕・永岡 喜代太
- 安永 友儀・岩永 皓・河村 新一
- 岡本 金蔵・市丸 義春・財部 一雄
- 神谷 誠・田代 直輝・佐々木 謙
- 森 重人・三宅 碧子・川浪 由紀子
- 小山 富夫・藤野 昌哉